

シニア層に迫る「親の介護」と暮らし生活

政府は去る6月2日午前の閣議で、平成18年版「高齢社会白書」を決定しました。

それによると、65歳以上の高齢者人口は平成17年10月1日現在、前年より72万人増えて2560万人となり、総人口に占める高齢者の割合(高齢化率)は20.04%で初めて2割を超えたとのこと(左の表参照)。人口、高齢化率とも過去最高を記録。また、労働力人口に占める65歳以上の比率は7.6%。今後、女性の高齢者の比率が高くなるようです。

すでに在宅介護の現場においては、介護をする側も圧倒的に女性が多いという現実があります。妻として、娘として、息子の妻として。介護を引き受ける人の7割以上が女性であるということです(表紙のグラフ参照)。

医学の進歩により高齢化が進み、その結果シニア層にとっては高齢になった親を見る生活が長期にわたることになるのです。

●介護問題は女性問題?

介護を受ける側もする側も圧倒的に女性が多いという現実があるからです。要介護者の6割以上、主な介護者の7割以上が女性であり、また同居の介護者の内訳を見ると「配偶者」「子」と並んで「子の配偶者」が約3割を占めています。そのほとんどは女性ということになります。

娘が老親を引き取った場合は自分で世話をしますが、息子は妻に介護を丸投げしているという実態がここから窺えます。

こうした状況の中で介護を担う女性たちの負担は、単に肉体的なものだけではなくありません。無給の労働である家族介護を担うことで、女性は経済的に自立することが難しくなります。一方、ケアワーカーとして働く女性も増えています。職業としてもなお、ケアは女性の仕事になりがちです。実際に介護の現場で働いているケアマネージャー

のKさんとそのパートナーにお話を伺ってみました。

Kさん夫妻
妻はケアマネージャーとして活躍中
夫は定年退職の後、趣味を楽しみながら妻をバックアップ

妻 外で安心して働く事が出来るのは、夫の助けがあったことだと思います。感謝の気持ちから、働いたお金が貯まると二人で旅行や外での食事を楽しんでいます。

夫婦だって歯車がぴったり噛み合っているわけではなく、中間にもう一つの歯車(趣味、友人)があってスムーズに回転するのだと思います。お互いの別の仲間と心のふれあいが必要なんです。

介護している女性が、夫に先立たれ「寂しい」とおっしゃっていました。どんなに仲が悪くても二人で居た方が幸せで、熟年離婚なんて私には

考えられません。

人生が終わるときに「良い人生だった」と、お互いが心から言える関係がベターだと思います。



ケアプラン作成中のKさん

夫 家において時間がある者が家事をやるのは当然だと思います。

今は自分が好む献立で食事を作るし、それを疲れて帰宅する妻の分まで用意するだけなのでそんなに難しい事ではありません。

夫婦は何十年やっても所詮は他人同士であることを自覚して、それぞれが自立することが重要(二人の人間が別々に生きられる)です。

定年後、いつも一緒にいると今まで見えなかった妻の姿が見えてきます。妻も同様に今までやりたいことを我慢してきたのだから、「これからは自由にさせて」と言う気持ちになるでしょう。

些細なことでも気分が悪いときはイライラが募るので、外に出て気分転換をすることが大事。その為にも趣味をもつことが最低限必要です。

ただ、こちらのお宅はすこし勝手が違うようです。

高齢化の現状

単位:万人(人口)、%(増加率、構成比)

	総数	男	女
年少人口(0-14歳)	1,756	901	855
生産年齢人口(15-64歳)	8,459	4,250	4,210
高齢者人口(65歳以上)	2,560	1,084	1,477
前期高齢者(65-74歳)	1,403	655	748
後期高齢者(75歳以上)	1,157	429	728
総人口	12,776	6,234	6,542
	(性比)105.4		
	(性比)101.0		
	(性比)73.4		
	(性比)87.6		
	(性比)58.9		
	(性比)95.3		

	年少人口	生産年齢人口	高齢者人口(高齢化率)
人口(万人)	13.7	66.2	20.0
構成比	14.4	68.2	17.4
	13.1	64.4	22.6
			11.0
			10.5
			11.4
			9.1
			6.9
			11.1
	100.0	100.0	100.0

※平成17年10月1日現在
※性比は、女性人口を100とした男性人口の割合
※数値は四捨五入してあるので、内訳の合計が総数に合わない場合もあります。
0歳~64歳までは男性の比率がやや高いが、65歳以上になると逆転し、女性の比率がかなり高くなる。結果として総人口で女性人口が男性人口を上回る。

平成18年版高齢社会白書より作成

●熟年離婚は身近な問題?

2007年、団塊の世代が大量に定年を迎えます。さらに年金分割制度の影響により熟年離婚が増え、日本は大きく変わると言われています。

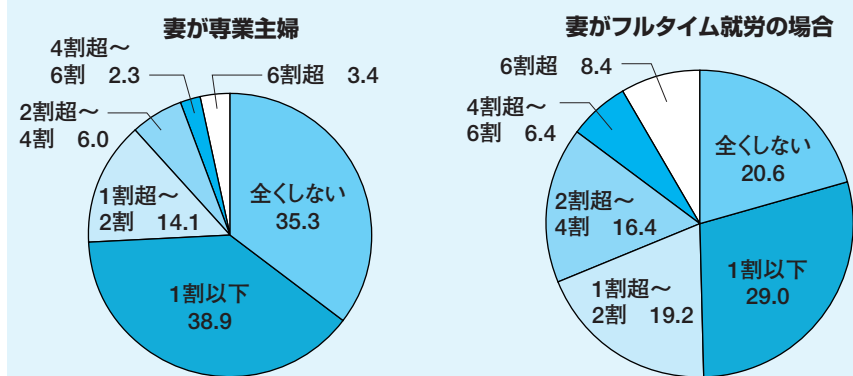
男性は、退職後は夫婦二人でのんびりと過ごしたいという「癒し」心境である一方、妻にとっては毎日夫が傍にいたことがストレスになるという意見もあります。

社会保障人口問題研究所が家庭動向調査を実施した結果によると、妻がフルタイム就労の夫婦でも家事をしない夫は二割います。(下のグラフ参照)

「妻が家のことをするのは当然」という考えがある場合、妻はいつまでも家事から解放されません。

この意識のズレが問題の根底にあるのではないのでしょうか?

夫の家事負担割合



国立社会保障・人口問題研究所「第3回全国家庭動向調査」より作成

●シニア世代に浸透しつつある「男のケア」の現状

女性が他人の世話をするのは当たり前という考え方が一般に根強くあるため、苦勞が理解されず、感謝もしてもらえない。妻や姉妹に親の介護をまかせておきながら、遺産相続や葬儀にかかわる権利は主張する男性もいるという声も聞かれます。

ただ、そこには長い男性中心社会のなかで培われた、男性をめぐる文化や信念——優越志向、権力志向、所有志向——なども影響しているのかもしれない。

男性の介護参加、および介護そのものの社会化を促進するシステムづくりが緊急の課題といえそうですが、従来あった、こうした「男らしさ」に関する思い込みから離れる必要もありそうです。団塊の世代が「男らしさ」という呪縛から解放されることが社会全体の改革の歩みが進む気がします。



参考:「男女共同参画統計データベース」

「図解雑学ジェンダー」ナツメ社

働き盛りの30代共働き夫婦にとって、その両親、つまり団塊の世代の理解は必要です。ところが、そのシニア層の男女共同参画の実現はどうなっているのだろうか?そこに注目してみたいところ、男女共同参画社会の実現のパロメーターともいえるべき世代であるように思いました。